

point 1 その時、家畜たちはどうする？

近年、自然災害が頻発する中で次の大災害への警鐘も含め、防災・減災に関する報道を多く目にします。その中で、ペットの同伴など動物の避難についても検証されていますが、家畜動物については表立って議論すらされていません。

工業型畜産と言われる、狭い動物舎で効率よく短期間で飼養管理を行う日本の畜産現場は、そもそもが災害に弱い構造です。閉じ込められた環境で、水と電気などのライフラインが止まると、それは死を意味する。東日本大震災等の大災害で、地域に存在する伝統的目つ遺伝的に貴重な家畜たちの命が、ほんの一瞬で失われた事実を知り、有事を想定した家畜動物の防災こそが持続可能な畜産の根幹であり、スタートラインではないかと考えました。



生産性は高いが災害に弱い牛舎構造



繋がれたまま餓死した家畜達 (希望の牧場 提供)

point 2 家畜避難場所の条件

農林水産省は、家畜の防災についてHP上で呼び掛けています (https://www.maff.go.jp/j/saigai/taisaku_gaiyou/tikusan.html)。非常用電源の確保や1週間以上の飼料備蓄、そして「家畜避難について事前に検討を」と記されていますが、果たしてそのような場所は存在するのでしょうか？この問いに対して、矢板高校では2023年から学校放牧場を地域内家畜動物達の避難場所とするための研究を開始し、避難放牧実績がある被災地の牧場などを参考に避難計画の策定や整備を行いました。



地域内に57の牧場 約3500頭の牛

セルフビルドによる仕切柵

備蓄飼料

家畜避難場所 3条件

- ①避難距離は1時間圏内
- ②強固な囲いがある
- ③停電や断水に左右されない餌と水がある

point 3 地域で取り組む災害への備え

産学官民の連携を図り地域一体となって、これまでに2度の避難訓練を実施しました。農家プロファイリングや避難トリアージなど、実践の中で見つけた課題を解決する新しい取り組みにもチャレンジしています。専門家からは「生産者は日常的に災害時のことを考える余裕がない。災害を想像させる意味でも非常に意義ある訓練」との評価もいただきました。

1 取組概要

大きな災害時に、家畜動物が取り残されている（農家も避難できない）という報道が多いことから、家畜動物避難のプロトタイプを構築することが目的である。

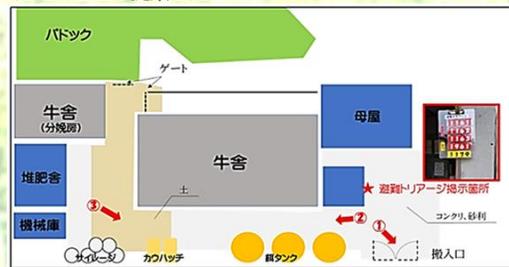
被災による農家（特に畜産業）の廃業や地域の衰退を食い止めるために、フェーズフリー性の高い放牧場を家畜動物の緊急避難場所として整備・発信し、農家の防災意識向上へと繋げたい。



断水・停電・飼料輸送など非常時の問題を一時的に解決できる「避難場所」としての放牧場

3 農家プロファイリング & 避難トリアージ

それぞれの牧場の構造や災害リスクなどについて農家と話し合い、可視化することで日頃からの防災意識の向上に繋げる新たな取り組み。守るべき血統や思い入れのある牛についても協議し、避難トリアージを表示していただくことも提案した。



3カ所の農家を訪問して実施 牧場主と対話をしながら共有していく

2 家畜動物の避難訓練

昨年初めて行った避難訓練をブラッシュアップし、2回目となる家畜動物対象の避難訓練を実施。行政機関や地元JA協力のもと、4カ所の牧場(避難対象牛10頭)より、スムーズ且つ有事に即した避難を実現することができた。監修した動物行動学の専門家からは「生産者は日常的に災害時のことを考える余裕がない。災害を想像させる意味でも非常に意義ある訓練」との評価もいただいた。



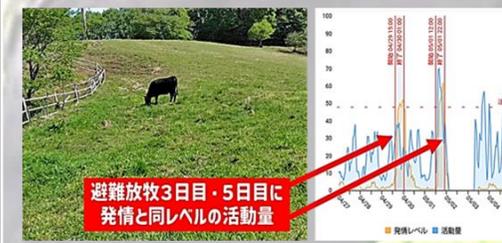
協力農家・JAと連携し 速やかに学校放牧場に避難

校内の土砂災害警戒区域にある牛舎からも避難させた

家畜運搬車から避難場所へ 100頭の牛が1ヶ月生存可能

4 避難放牧とストレスチェック

避難した後の牛をそのまま放牧させ、センサータグによる行動モニタリングや血液検査など、避難後の牛体への影響・ストレス等についてデータ収集を継続中。動物行動学やアニマルウェルフェアの専門家とも連携しながら検証を重ね、家畜動物避難のプロトタイプとしてブラッシュアップを行っている。



安全性を担保・可視化するための 定量データ(行動量・血中ビタミンetc)を常時把握

5 今後の展開

家畜動物の避難訓練を通して、地域全体の防災意識を高めることが目的のため、地域住民にPRする活動をさらに展開させたい。その過程で「家畜だって避難する。では、私たちは？」という問いを多くの地域住民に投げかけていきたい。



放牧場開放イベント 子供たちに芝種団子を投げてもらう

point 4 このまちのグランドデザインを描く

活動をしていく中で、前例のない取り組みであると、多方面から注目していただくようになりました。今後は、研究機関からも意見をいただきながら、社会に還元できるようブラッシュアップしていきたいと思います。

「バタフライエフェクト」という言葉がありますが、蝶のはばたきが、少しずつ大きくなりどこか遠くでハリケーンを巻き起こす様に、私たちのアイデアや活動が、将来に家畜動物や農家さんの命を繋ぎ、持続可能な農山村社会の構築に貢献できる技術へと昇華できるよう、家畜動物の防災・減災を追求していきます！



【本活動の主な受賞歴】

- 2023年度：第2回高校生食のSDGsアクションプランコンテスト最優秀賞・第9回全国ユース環境活動発表大会最優秀賞
- 2024年度：栃木県学校農業クラブ各種発表大会プロジェクトⅢ類最優秀賞・フェーズフリーアワード2024アイデア部門GOLD・愛媛大学社会共創コンテスト2024特別賞・地域活性化策コンテスト田舎力甲子園2024最優秀賞・1.17防災未来賞「ほうさい甲子園」フロンティア賞
- 2025年度：全国高校生農業アクション大賞第7回大賞・第13回グッドライフアワード実行委員会特別賞・関東農政局ディスカバー農山漁村の宝認証・1.17防災未来賞「ほうさい甲子園」だじょうぶ賞